

# 経営探訪

株式会社清水企業

“企”てて“業”を成す  
レールと繋ぐ地域の未来



**株式会社清水企業**  
〒016-0121  
秋田県能代市臈淵字下悪戸116-3  
TEL. 0185-70-1333  
FAX. 0185-58-5550  
<http://shimizukigyo.com/overview/>

●設立/1983年  
●資本金/2,000万円  
●従業員数/57名  
●業務内容/土木工事、軌道工事(線路保守)、地域貢献  
その他建設工事全般に関する業務  
しみず やすし

代表取締役  
**清水 靖**  
しみず やすし

## MANAGEMENT REPORT

### 地域のインフラを支える

365日、日夜走り続ける鉄道。この当たり前の日常を支えているのが、線路の保守やメンテナンスを行う軌道工事を事業の核とする能代市の株式会社清水企業だ。

1983年に現代表の清水靖氏の父である清水勝美氏が34歳で独立し創業。同年に発生した日本海中部地震で甚大な被害を受けた能代市の復旧工事において、鉄道工事を担う建設会社との信頼を築き上げ、現在に至るまで軌道工事や土木工事を通して地域の重要なインフラを支えている。

「当社は復興工事と共に歩みを始めたといっても過言ではありません。建物を建て、道路を作るだけではない、“建設業”としての存在意義が試された経験と教訓は今も揺るぎない原点です」と清水代表は語る。

しかし、安定的な需要を持つ事業を請負いながらも、その歴史は決して順風満帆ではなかった。その後のバブル崩壊による経済低迷により、赤字続きの苦しい時代が訪れた。

「社員の士気が下がり、ベテランが次々に会社を去っていきました。会社の発展には人の手と技術が重要であるのに、経営悪化

のために雇用を維持できない悪循環に陥っていました」。

当時専務の立場であった清水代表は、企業イメージの刷新と経営改善を目指し、代替わりを提案。衝突を繰り返し、それでも父の想いを尊重しながら話し合いを重ね、創業25周年の2008年、創業時の父と同じ34歳で代表取締役役に就任した。

### 再始動は、人と、地域とともに

事業承継後、清水代表は、業績の悪化に伴い失われた企業としての信頼を取り戻すため、睡眠時間を削り奔走した。「私自身、それまで決して褒められるような人生を送ってこなかった。時計の針は戻らないので、人が休んだり遊んだりしている間にも徹底的に努力するしかなかった」と笑う清水代表は、受注開拓を行う傍ら、地域のボランティアや祭りに積極的に参加し、人が嫌がる仕事も率先して引き受けた。時には厳しい言葉に挫けそうになることもあったが、苦労した経験を持つ人たちの温かな言葉によって救われた。

「地域の人と共に汗を流すことで前を向くことができました。いつか、自分も誰かを救えるようになりたいと思いました」。

努力は徐々に実を結び、5・6年後から業績は黒字に転換、地元の高校から出前講座の講師として招かれるようになり、採用も軌道に乗り始めた。現在は50名以上が在籍する大所帯だ。

“育てること”を重要視する清水代表は、社員の自主性を重んじる。自身も長い現場経験を持ち、天候などの不可抗力に左右される現場を知るからこそ、仕事の進め方や仕組みづくりは社員たちに一任する。赤字になることもあるが、決して社員に責任を負わせることはない。

「社長の役割は動機を与え、結果に対して責任を負うことだけ。失敗したら、“次”の理想の進め方をイメージしてもらおう。経験を積んで、考え、社会情勢を見る力を身に付けていくことが成長に繋がると考えています」。

もちろん、徹底した安全管理とミリ単位のズレも許されない高い技術力が求められる現場を担う以上、技術の向上に余念はない。「技術に勝る安全第一はない」という信条のもと、年間の安全管理計画を策定し、自社の訓練用線路を用いた体感訓練や定期的な技術試験を行っている。



### 線路が必要とされるまちづくり

事業内容に、軌道工事・土木工事と並んで地域貢献が掲げられているとおり、社外でも多くの人と出会い、語り、信頼関係を築いてきた清水代表の地域への想いは誰よりも強い。地域での新卒採用に加え、中途採用では様々な事情で働けなくなった人や引きこもりになってしまった人の積極的な採用も行っている。

「挨拶でも何でも、まずは何かひとつ一番を目指していくうちに自然と仕事はついてきます。また、仕事の一環としてボランティア活動の良さを体験することで、次につながるいい循環ができています」と、若い世代が多いからこそ、清水代表は社員たちへの気配りも欠かさない。時には父親のようにその肩を叩き、社員一人ひとりと向き合いながら、次代の担い手の育成に力を入れる。

「私たちの仕事は線路を維持しながら、線路が必要とされるまちづくりを行っていくこと。地域の発展につながる提案を“企”てて“業”をなせる存在でありたいと思っています」。

地域とともに培ってきた技術と誇り。今日も、2本のレールの上を車両が通過する当たり前の風景を守りながら、未来を見据えた建設業の新しいローカルスタンダードを提案していく。

1 訓練用線路を用いた体感訓練の様子  
2 現場では社員の自主性に委ねられる

3 地元の高校生向けにも積極的にPRを行っている  
4 地元の祭り「天空の不夜城」には社員が毎年参加